

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

## 2011 年度第 3 回研究会報告書

### 東アジア・東南アジア大陸における文化圏の形成と他文化圏との接触—タイ文化圏を中心として—

日時： 2011 年 10 月 1 日（土）午後 1 時 30 分から 6 時 30 分

場所： 東京外国語大学 AA 研棟マルチメディア会議室（304）

報告：

1. 新谷忠彦（AA 研元所員）  
「金平瑶語(Mien)を特徴づける音韻論上の諸点について」
2. 徳安祐子（九州歯科大学非常勤講師）  
「ラオス山地民カターンの生活空間—人と精霊が生み出す空間」
3. 園江満（東京農業大学国際食料情報学部・農学部 非常勤講師）  
「山地民としてのタイ Tay—ラオスにおける稲作の諸相から」

#### 報告の要旨

この度の研究会では、雲南とラオスを中心に、タイ文化圏の諸言語にみられる南北の影響及びラオスの山地民の世界を取り上げた。タイ文化圏の先住民族として、モン・クメール系諸語の話者が知られているが、この度の研究会では中国から南下したヤオ族の言語について新谷忠彦氏に発表して頂いた。また、ラオス中南部のサワンナケート県に居住するモン・クメール系民族であるカタン（カターン）の精霊について徳安祐子氏に発表して頂いた。さらに、盆地のタイ族と山地民の区分について稲作栽培の観点から園江満氏に発表をして頂いた。（唐立）

#### 1. 「金平瑶語(Mien)を特徴づける音韻論上の諸点について」

ミャオ・ヤオ系民族はその多くが現在の中国領内に居住し、タイ文化圏に南下してきたのは比較的新しい時代のことである。このグループに属する言語・方言は多種多様であるが、その中でもタイ文化圏に見られるのはヤオ系のミエン語とムン語、ミャオ系のフモン語とこれにきわめて近いモン語だけであって、そのほかの言語はみな中国領内にしか見られない。

分布地域から見れば、ミャオ系言語は相対的に北に分布し、ヤオ系の言語は相対的に南に分布する傾向がみられる。また、ミャオ系の民族は集団が大きいものに対して、ヤオ系の民族は集団が小さい傾向がみられる。

音韻論上の特徴からはミャオ系の言語は音節末子音がほとんどの言語で失われているのに対し、ヤオ系の言語は、多くの場合、音節末尾に閉鎖音 (-p, -t, -k) 及び鼻音 (-m, -n, -ng) を保存している。一方、初頭子音の方は、ミャオ系の言語がヤオ系の言語に比べて複雑な体系をもっている。声調体系はミャオ系、ヤオ系ともに複雑な体系を見せており、一部の例外的な言語を除き、6声調以上の声調を持っている。

金平瑶語はヴェトナム国境に近い中国雲南省金平県で話されているヤオ系の中のミエン語の一種であって、ヤオ系の言語としては珍しく、音節末子音が簡素化されている。その閉鎖音 (-p, -t, -k) はすべて声門閉鎖音 (-ʔ) に変化しており、鼻音 (-m, -n, -ng) は -m と -n が融合して -n となっている。また、主音節の前に前音節がくっつく場合の前音節においては、-n と -ng との対立も失われてしまっている。更に、こうした前音節における声調はすべて下降調をとり、二音節語における前音節の声調の対立もなくなっている。前音節におけるこのような音節末尾音の対立や声調の対立の消失は、この地域の漢語の中にも見られ、地域的な広がりをもった特徴と言えるかもしれない。もう一つ興味深い現象として、音節末に -n を持つ音節が、特定の声調と結び付いた場合に、声門閉鎖音に変化する現象が観察される。(新谷忠彦)

## 2. 「ラオス山地民カターンの生活空間一人と精霊が生み出す空間」

ラオス中南部に暮らすモン・クメール系民族カターンの村でおこなった調査をもとに、村の人びとの生活空間と、そこに深く関わる精霊たちとの関係について報告をおこなった。精霊信仰とそれに関わる慣習は、村の人びとが自らと周辺のタイ系民族とを差異化する語りのなかでもあらわれ、また、その場その場に応じて作り出されるウチとソトとの境界を示すものとしても語られる。一方で、家のような空間では、精霊と人びととの関係から細かくその場その場での振る舞いが規定されている。彼らにとって精霊との関係から作り出される生活空間がどのようなもので、それがどのように区切られ、どのようにつなげられるのか、ということについて検討をおこなった。

まずは、調査地におけるカターンとタイ系民族とがどのような関係を持ってきたのかということについて紹介し、さらにカターンの人びとが、タイ系の人たちが捨てていった精霊や精霊に関する慣習を守り続ける人びととして自己認識し、タイ系の人びとからは精霊や「不思議な力」との密接な関係を持つ人たちとして見られている現状について紹介した。その上で、彼らの生活空間に深く関わる精霊との関係について報告をおこなった。

報告では、領域に関する精霊について概観し、村の人びとにとって最も重要であり、最も人と濃密な関係を持つ家の精霊を中心に検討した。家の精霊と人との関係は家の空間をさまざまに区切り、意味づけ、そこでふるまいを規定していく。そして、その規定されたふるまいを繰り返すことによって、その空間が維持され、精霊との関係、家の構成員間の関係が維持され、住人の身体に刻み込まれていく。また一方で、家の精霊は親族集団を

つなぐものでもあり、人びとの家・村と森の間をつなぐ存在としてもあらわれる。このようにつくりだされた領域は、そこに暮らす人々が精霊の慣習を共有し、守ることによって顕在化し、維持される。このように、家の精霊についてみていくと、精霊は集団や空間の中心になるだけでなく、その外部とのつながりを生み出すものでもあることがわかる。そのなかでウチとソトとの境界は人びとがその場その場での必要に応じて用いる言説ともなっている。なかでももっとも対立的にあらわれるのが周辺に暮らすタイ系のプータイとの差異であり、人びとは精霊や慣習をプータイに対してアイデンティティをあらわすものであるかのように語るのである。(徳安祐子)

### 3. 「山地民としてのタイ Tay—ラオスにおける稲作の諸相から」

多民族国家であるラオスでは、2008年に現行の49民族分類が規定された後2009年に正式に使用が禁止されるまで居住地標高区分による3民族分類が一般的に行われており、タイ系民族の多くは低地に住み水田稲作を行う仏教徒として「低地ラーオ」と呼ばれていた。

しかしながら、ラオス揺籃の地である北部の稲作は、現在なお焼畑陸稲作によって支えられており、陸稲性の強い熱帯ジャポニカ品種の作付けや、斜面の伝統的灌漑システムによる水田稲作でも、陸苗代への播種棒を用いた点播を行うなど「陸稲栽培複合」と形容できる技術が広く見られる。また、水田準備の整地体系でも、「タイ文化圏」に属する北部地域では中国系杵型犁と2種類の耙を用いるのに対して、比較的粗放な天水田地帯であるヴィエンチャン以南のメコン河沿岸地域では、マレー犁の系譜をひくY字型の無犁柱犁を使用しており、二つの稲作は異なった文化的背景を持つものと考えられる。

一方で、最近の調査からタイ文化圏の外郭域にあたるラオス北東部から東部脊梁山脈地域では、焼畑で一般的な長い堀棒とは異なる専用の筥状播種棒と穂摘具を一般的に使用していることが確認され、モン・クメール系民族との文化的・技術的交流の痕跡を残しつつも、タイ系民族独自の陸稲栽培技術を持っていた可能性が濃厚となってきている。特に収穫法の面では、鎌による株刈と稲巻棒・打穀台による収穫・調整法がタイ系民族の間で一般的であると考えられてきたが、公定民族としてのラーオを構成するプアンやポーといった民族は小刀で高刈を行っており、現在ラオス全国で普遍的な収穫法は比較的最近になって取り入れられたものと看做すことができる。

これらの事実は、タイ系民族の稲作技術が、北部に点在する山間盆地における「原初的水田」からメコン沿岸の低地に移動したことに伴う水田化のほかに、脊梁山脈に沿って南下したグループでは、標高の高い相対的に水田不適地という環境において、独自の陸稲栽培技術を継承してきたというオプションを残していることを示しており、タイ系民族を水田農耕民としてみるだけでは、この地域の稲作と農業の実像は掴めないという意味で、本タイトルに示される問題を提起した。(園上 満)

いずれもの発表に対しても活発な質疑応答が行なわれた。新谷氏の発表については、議論が主に金平瑤語の音韻論上の特色が何故生じたかという点に集中した。新谷氏は他の言

語（モン・クメール系言語、イ語や漢語など）からの影響が少なくないと考えている。音節が複数続いた場合、この地域の漢語でも第一音節が弱くなり、末尾子音が消失したりし、声調が変化する現象がみられる。Tone Sandhi については、複音節語では最終音節以外は声調の対立がないとなっているが、語彙レベルでの議論ではなく、文章の中での表現形式も含めた広範な検討が必要であるとの意見が出された。徳安氏の発表については、議論が主に精霊のあり方に集中した。発表者は調査対象者のカターン族の母語ではなく、ラオス語で調査を実施したため、カターン族とラーオ族の精霊観には同異があるのか、ないのかが分かりにくいのではないかという指摘があった。また、森で祀られる死者と村落内の精霊の関係、また精霊を森と村落の空間で区別する点についてはさらなる説明が必要ではないかといった意見が表明された。園江氏の発表については、議論が主に道具とその使用に集中した。その中では穂摘み具が注目を集めた。園江氏は穂摘み具が鎌に代替された要因としては、中国とベトナムから安価な鎌が供給され、また鎌が水田耕作とセットになって導入された点などを挙げていた。（唐立）